

# 火夫

DER HEIZER

フランツ・カフカ Franz Kafka

青空文庫



十六歳のカルル・ロスマンは、ある女中に誘惑され、その女とのあいだに子供ができたというので、貧しい両親によつてアメリカへやられたのだが、彼がすでに速度を下げた船でニューヨーク港へ入つていったとき、ずっと前から見えていた自由の女神の像が、まるで突然強まった陽の光のなかにあるように見えた。剣をもった女神の腕がまるでつい今振り上げたばかりのようにそびえ、その姿のまわりにはただようような風が吹いていた。

「あんなに高いぞ！」と、彼は自分に言い、まるで船を去ることを考えないような様子で、彼のそばを通り過ぎていく荷物運搬人たちがいよいよ数を増していくのに押されて、だんだんと舷側の手すりまでいつてしまった。

航海中に一時的に知合いになった一人の若い男が、通りすがりにいった。

「ほう、まだ降りる気がないのかい？」

「もう準備はすんでいますよ」と、その男に笑いかけながらカルルはいつて、自分がたくましい青年なものだから、自慢げにトランクを肩に担いでみせた。しかし、ステッキを少し振りながらもうほかの人びとと去つていくその男のほうを見ていたとき、自分の雨傘を下の船室に忘れてきたことに気づいて驚いた。彼はあまりありがたそうには見えない一人

の知人に、ちよつとトランクの番をして下さい、と頼んで、帰りに道をまちがえないようにあたりの様子を見廻してから、急いで立ち去った。下へ降りて行って、近道になるはずだった一つの通路がはじめて遮断しゃだんされているのを発見して、困ったことになったぞ、と思った。この遮断はおそらく船客全員を下船させることと関係があるらしかった。そこであとからあとから曲りくねった廊下を通り、書きもの机が一つだけぽつりと置いてある人のいない部屋を一つ通つて、つぎつぎにつづく階段を骨折つて探していたが、この道はただ一、二度だけ、それもいつも大ぜいの仲間と歩いただけだったので、ほんとうにすつかり道に迷つてしまった。途方にくれてしまい、だれにも会わないし、ただたえず頭の上千人にも及ぶたくさんの人びとの足音が聞こえ、遠くのほうからすでに停止した機関の最後の音がまるで息のように聞こえてくるだけなので、よく考えてもみないで、うろつき廻つたあげくにいきどまりになった任意の小さなドアをノックし始めた。

「開いているよ」と、なかから叫ぶ声が出た。そこでカルルはほんとうにほつと息をつきながらドアを開けた。

「なぜそんなに気がちがつたみたいだにドアを打つんだね」と、一人の大男が、カルルのほうをほとんど見ないでたずねた。どこかの天窓からは、船の上のほうでとつくに使い古さ

れたような陰気な光がこのみすぼらしい船室へ射しこんでいた。この船室にはベッドと柵と椅子とその大男とが、まるで貯蔵品のようにびったり並んで立っていた。

「道に迷ってしまったんです」と、カルルはいった。「航海中は全然気がつかなかったけれど、恐ろしく大きい船ですね」

「そうさ。あなたのいうとおりだ」と、男はいくらか誇らしげにいいながらも、小さなトランクの錠前を扱うことをやめなかった。両手でくり返しその錠前を押えては、錠のぱちりと下りる音をじつと聞いているのだ。

「まあ、入んなさい！」と、男はさらにいった。「まさか外に立っているわけにもいくまいからね」

「おじやまじやないですか」と、カルルはたずねた。

「ああ、どうしてじやまになんかなるものかね」

「あなたはドイツ人ですか」と、カルルはたしかめようとした。ことにアイルランド人によつてアメリカへ着きたての者たちがこうむるおそれのある危険について、いろいろ聞かされていたからだった。

「そうだよ、そうだよ」と、男はいった。

カルルはまだためらっていた。すると男は不意にドアの取手をつかみ、ドアを素早く閉めるとともにカルルを引きこんでしまった。

「通路からのぞかれるのが、我慢できなくてね」と、男はまたトランクの仕事にかかりながら、いった。「だれでもあそこを通つては、のぞきこんでいきやがる。それに我慢できる者なんてほとんどいないだろうさ」

「でも通路には全然人がいませんよ」と、カルルはいった。ベッドの柱に押しつけられて窮屈そうに立っている。

「うん、今のところはね」と、男がいった。

「だが、その今が問題じゃないか。この男とは話がむずかしいぞ」と、カルルはひそかに思った。

「まあ、ベッドの上に横になんなさい。そこは場所があるからね」と、男はいった。

カルルはできるだけうまくはつて入り、はじめに飛びこんでやろうとして失敗した試みを大きな声で笑った。だが、ベッドに入るやいなや、叫んだ。

「しまった、ぼくはトランクのことをすっかり忘れていた！」

「どこに置いたのかね」

「上のデツキですよ。知っている人が番をしてくれています。ところでなんとという名前の  
人だったかな？」そして、母親が旅行のために上着の裏につけてくれた隠しポケットから  
一枚の名刺を取り出した。「ブッターバウムだ。フランツ・ブッターバウムだ！」

「そのトランクはとても大切なもんですかい？」

「むろんですよ」

「それならなぜ知らない人にあずけたりなんかするのかね」

「下へ雨傘を忘れたんで取りにきたんですが、トランクをひきずって下りたくはなかった  
ものだから。おまけに道に迷ってしまったんです」

「ひとりかね？ つれはいなさらないのかね？」

「ええ、ひとりなんです」

「おそらくこの男を信用したほうがいいのだろう」と、こんな考えがカルルの頭をかすめ  
た。「すぐにこれよりもいい友だちが見つかるものでもないし」

「で、トランクも失くしてしまつたわけだね。雨傘のほうはわかんないがね」そして、男  
はまるでカルルのことが今ではただ一つの自分の関心事となつたといわんばかりに、椅子  
に腰を下ろした。

「でも、トランクはまだ失くなくなったわけじゃないと思いますよ」

「そう思ううちがしあわせでさあ」と、男はいつて、短くて濃い黒い髪の毛をごりごりかいた。「船では、港々でしきたりがちがうんでさあ。ハンブルクではあんたのブーツターバウムはきつとトランクの番をしていただろうが、ここではきつとトランクも傘も両方ともあとかたもないだろうよ」

「それじゃあ、すぐ上へいかなくちやならない」と、カルルはいつて、どうやって出ているのか、とあたりを見廻した。

「まあ、ここにいなさるんだな」と、男はいつて、片手で手荒なくらいに胸を突いてベッドへ押しもどした。

「どうしてです？」と、カルルは腹立たしげにたずねた。

「意味がないからさ」と、男はいつた。「ちよつとしたら、わしも行くよ。そのときいっしょにいこう。トランクが盗まれていたら、どうしようもないし、その人が置きつ放しにしておいたなら、船がすっかり空っぽになれば、それだけ見つけやすいわけだ。傘だってそうさ」

「船の上のことはよく知っているんですか？」と、カルルは不信をこめてたずねた。船が



空になったら自分の品物がいちばん見つけやすいだろう、というふだんならば納得のいく考えが、隠れた難点をもっているように思われた。

「だって、わしは火夫でさあ」と、男はいった。

「あんた、火夫さんですか！」と、まるでそのことがあらゆる期待を超えていたようにうれしそうに叫んで、肘<sup>ひじ</sup>をついてその男をもっと近くながめた。

「ぼくがスロワキア人といっしょにいた船室のすぐ前にのぞき窓がついていて、そこから機関室が見えましたよ」

「そうだ。わしはそこで働いていたんだ」と、火夫はいった。

「ぼくは前から機械のことに興味があつたんです」と、カルルは一定の考えの筋道をたどりながらいった。「で、もしアメリカにこなければならなかったなら、きっと将来は技師になったことでしょう」

「いったい、なぜこなければならなくなつたんだい？」

「いや、どうも！」と、カルルはいつて、その話は手を振って拒んだ。そうしながら、告白しないことも大目に見てもらいたいというように、微笑して火夫の顔をじつと見た。

「何かわけがあるんだね」と、火夫はいつたが、その言葉でその理由を話すようにと要求

しているのか、それともそれを拒もうとしているのか、はつきりはわからなかった。

「今では火夫にだってなつてもいいんです」と、カルルはいった。「両親にとっては、ぼくが何になつたつてどうでもいいんですから」

「わしの職があくよ」と、火夫はいつて、それを十分に意識しながら両手をズボンのポケットに突っこみ、しわくちやな、革のような、鉄色のズボンに包まれている脚をベッドの上に投げ出して、ながながとのぼした。そこでカルルはもつと壁のほうによらなければならなかった。

「船をやめるんですか」

「そうだよ。わしらはきよう出発するんだ」

「いったい、なぜなんです？ 気に入らないんですか？」

「そうだな、いろいろ事情があつてね。気に入るとか入らんとかいうことでは、いつてもきまるもんじやないさ。ともかく、あんたのいうことはもつともで、わしには気に入らなくもあるさ。あんたはきつと、火夫になることをまじめには考えてはいないんだ。そんなことならいくらでも手軽になれるだろうよ。だから、わしはきつぱりとやめろというね。ヨーロッパで学問するつもりだったのなら、なぜここでも学問しようと思わないんだね？」

アメリカの大学はヨーロッパのより比べものにならぬくらいいいんだぜ」

「そうかもしれない」と、カルルはいった。「でも、学問するための金がほとんどないんですよ。昼間はどこかの店で働き、夜は勉強して、ついにドクトルになり、たしか市長かなんかになった、っていうような話をだれかの本で読んだことがあるけれど、それには大変な忍耐が必要でしょうね？　ぼくにはその忍耐が欠けているんじゃないか、と思うんですよ。その上、ぼくはそれほどいい生徒じゃありませんでした。学校をやめることも、ぼくには実際それほどつらくはなかつたんです。それからこの学校はきつともつときびしいでしょうからね。英語はほとんどできないんです。およそこの人たちは外国人にひどく偏見をもっていると思いますね」

「あんたもそれをもう経験したんですかい？　そうか、そりやあいい。それならあんたはわしの相棒だ。いいかね、わしらはドイツ船に乗っているわけだ。ハンブルクⅡアメリカ航海の船だ。それなのになぜわしらはこの船でドイツ人ばかりじゃないのかね？　なぜ機関長はルーマニア人なのかね。機関長はシュバルっていうんだ。こいつが信じられんことだ。このならず者がドイツ船でわしらドイツ人をしぼり上げているんだ。いったいあんたは——」ここで息切れがして、手をゆらゆらと振った。「わしが、文句のための文句を

いつていると思うかね。あんたにはなんの力もないし、自分自身がすかんぴんの若者だということはわかっているさ。だが、これじゃあ、あんまりというもんだ！」そして、テールの上を拳で<sup>こぶし</sup>何度かたたき、たたきながらも眼を拳から離さないでいる。「わしはとてもたくさんの船で働いた」——そして彼は二十ばかりの名前を立てつづけにまるで一語のように並べた。カルルは頭がすっかり混乱してしまった。「それですばぬけた働きぶりを見せて、ほめられた。船長たちの趣味に合った働き手だったんだ。一つの貿易帆船に二、三年もいたこともある」——それが彼の生涯の絶頂であるかのように、立ち上がった。

「それがこのボロ船じゃあ、万事が規則づくめでできているし、洒落<sup>しやれけ</sup>気ひとつあるじゃない。この船じゃあ、わしはなんの役にも立たない。いつもあのシューバルのじゃまばかりして、なまけ者で通っている。海へおっぱり投げられたってしかたがない。給料はお情けでもらっている。こういうんだよ。わかるかね。わしにはわからんね」

「そんなことをいわれて黙っている手はありませんよ」と、カルルは興奮していった。彼は自分が船の不確かな床の上にいる、未知の大陸の岸にいるのだ、という感情をほとんど失くしてしまっていた。こうやって火夫のベッドの上にいる、そんなにも気がおけない思いがするのだった。「で、船長のところへいきましたか？ 船長のところであんたの権利

を主張したんですか」

「まあ、出ていってくれ。ここから出ていってもらいたいな。ここにいてももらいたくないね。わしのいうことも聞いていないで、わしに忠告しようっていうんだから。どうしてわしが船長のところへいかなきゃならないっていうんだい？」そういうと、疲れたようにまた腰を下ろし、両手のなかに顔を隠した。

「この男にはこれよりいい忠告はしてやれないのだ」と、カルルは自分に言い聞かせた。そして、ばかばかしいと思われるような忠告をこんなところでやっていないで、むしろトランクを取りにいくべきだった、と思った。父親があのとランクを永久に譲ってくれたとき、「どのくらい長くこれを失くさ<sup>な</sup>ないでいるかな？」と、冗談にたずねたのだった。そして、この貴重なトランクはおそらくもうほんとうに失くなってしまったのだ。それでもただ一つよかったと思うことは、父親がいくら調べようと思ったところで、彼の現在の状態を知るわけにはいかないということだった。ただ、彼がこの船でニューヨークまで来たということだけしか、船会社は父親に教えることができない。だが、トランクのなかの品物をほとんど使わなかったことが、カルルには残念だった。たとえばシャツを着換えることがずつと前に必要だっただろうに。つまり、当をえないところで余計な節約をしていた

わけだ。今、これからの人生の門出にあたっては清潔な身なりで登場すべきところを、汚れたシャツを着た姿を見せなければならぬのだ。そのほかの点では、トランクを失くしたことはそれほどまずいことではなかったろう。というのは、彼が身につけている服は、トランクのなかにあるのよりもいいのだ。トランクのなかのは、ほんとうはただ間に合せの服で、母親が出発のすぐ前につくろわなければならなかったものだ。今、思い出したのだが、トランクのなかにはヴェロナのサラミ・ソーセージが一本入っていた。これは、母親が特別の贈物としてトランクに入れてくれたものだが、ほんの少ししか食べられなかった。航海のあいだ、まったく食欲がなくて、三等船室で配給されるスープで彼には十分すぎるくらいだった。だが、あのソーセージはもっていたかった。そうすれば、あれをこの火夫にやることができたらう。というのは、こういう連中は何かちよつとしたものをつかませると、すぐ味方につけることができるのだ。そのことは父親から教えられていた。父親は葉巻をわけてやることによって、商売の上で自分とかけ合いのある下っぱの社員たちを手に入れていた。今、カルルが贈物にできるものとしてもっているのは、金だけだった。だが、たといトランクはおそらく失くしてしまうということになっても、金だけではさしあたり手をつけたくなかった。ふたたび彼のもの思いはトランクにもどっていった。

そして、もし今このトランクをあんなに容易にもち逃げられるくらいなら、なぜその同じトランクを航海のあいだあんなに注意深く気をつけていて、それを見張るためにほとんど夜も眠れないくらいだったのか、さっぱりわからなかった。彼は航海中の五晩の夜を思い出した。そのあいだじゆう、彼の左側の二人目に寢床をもっていた小柄なスロワキア人が自分のトランクを狙<sup>ねら</sup>つてしていると、たえず疑いをかけていたのだった。このスロワキア人はただ、カルルがついに弱つてしまつてちよつとのあいだこつくりこつくり眠るのを待ち受けているのだった。昼間いつももてあそんだり練習したりしていた長いなわを使って、トランクを自分のところへたぐりよせようというわけだ。昼間はこのスロワキア人はひどく罪がないように見えるのだが、夜になるやいなや、ときどき寢床から起き上がつて、悲しげな顔つきでトランクのほうを見るのだった。カルルはこうしたこといっさいをはつきりと見わけることができた。というのは、船内規則では禁止されているにもかかわらず、いつでもあちこちで渡航者としての不安から小さな蠟燭<sup>ろうそく</sup>をつけていて、移民案内社のわがりにくい案内をなんとか呑みこもうとしているのだった。こういう蠟燭が近くにあればカルルは少しはうとうとすることができたが、その火が遠くにあるとか、まっ暗だとかいうときには、眼を開けていなければならなかった。この努力が彼をほんとうに疲れさせてし

まった。そして、今となってみると、こんな努力もおそらくまったく無用だったのだ。このトランクをもち逃げたブッターバウムのやつ、いつかどこかで出会うようなことがあったら、ただではおかないぞ！

ちようどそのとき、その部屋の外への遠くのほうで、これまでの完全な静かさを破るように子供の足音のような小さくて短な音が鳴り響いた。その音は響きを強めながら近づいてきた。それは男の人たちの静かな行進だった。通路が狭いのだから当然な話だが、その人たちは一列になつて歩いているらしかった。武器の鳴るようなかたかたという音がした。ベツドのなかで、トランクとスロワキア人についての心配から解放されて、すんでのことに眠りこもうとしていたカルルはびっくりして起き上がり、火夫をつついて彼の注意を向けようとした。というのは、行列の先頭がちようどドアのところまで達したらしかった。「あれは船のバンドだよ」と、火夫はいった。「上のデッキで演奏を終えて、荷づくりにいくんだ。これで全部すんだと。これでもう出かけられる。さあ、こないか！」

火夫はカルルの手をつかみ、最後の瞬間にベツドの上の壁から額ぶちに入つたままの聖母像を取り、それを胸のポケットに突っこんで、自分のトランクを手に取ると、カルルとともに急いで船室を出た。



「これからわしは事務室へいき、係の人たちにわしの考えをいおう。もうお客さんはいないから、遠慮していることはないんだ」

このことを火夫はいろいろな言いかたでくり返し、歩きながら足で横に払って通路を横切っていくねずみを踏みつけようとした。ねずみはもう十分間に合うところまで達していたのだが、ただもつと素早くその孔に飛びこんでいった。火夫はおよそ動作ののろい男だった。というのは、長い脚をもつてはいるものの、その脚があんまり重すぎるのだ。

二人は料理場の一画を通っていった。そこでは二、三人の汚ないエプロン姿の——彼女たちはわざと汁をかけたのだ——女の子たちが、大きなバケツのなかで食器を洗っていた。火夫はリーネとかいう女の子を呼んで、腕を女の腰へ廻し、色つぼくたえず男の腕に身体を押しつけてくるその女をつれて少しばかり歩いた。

「今、給料が出るぜ。いっしょに、こないかい？」と、火夫はいった。

「なぜあたしがいく必要があるのさ？ それよりお金をこつちへもつておいでよ」と、女は答え、男の腕をするりと抜けて、逃げ去った。

「そのハンサムな子、どこから見つけてきたのさ？」と、女はきいたが、もう返事なんかしてもらおうと思っっているのではなかった。仕事を中断していた女の子たちみんなの笑い

声が聞こえてきた。

二人は先へ進んで、一つのドアのところへきた。そのドアの上には小さな前びさしがついていて、そのひさしは小さい金ぬりの女神像の柱に支えられている。船の設備にはほんとうにぜいたくに見えた。カルルは、気づいたのだが、このあたりへ一度もきたことがなかった。おそらく航海中は一、二等の船客たちの専用場所だったのでろう。ところが船の大掃除を前にした今では隔ての壁がみんな取り外されたのだ。事実、ここへくるまでに二、三人の男たちに出会ったが、みんな箒ほうきを肩に担いでいて、火夫に挨拶したのだ。カルルは船の設備がりっぱなのに驚いた。三等船室ではむろんそんなことはほとんどわからなかったのだ。通路に沿って電線が張られてあり、小さなベルの音がたえず聞こえた。

火夫はうやうやしくドアをノックして、「入りましたまへ」という声が出たとき、かまわずに入れと手でうながした。カルルも入ったが、ドアのそばに立ちどまっていた。部屋の三つの窓の前には海の波が見えた。その楽しそうな動きを見ると、カルルの胸は高鳴った。まるで五日のあいだ海をたえず見ていたのではなかったようだった。大きな船がたがいに進路を交叉し、その重みが許すだけ打ちつける波に身をまかせていた。目を細くする

と、これらの船がただその重みだけでゆれているように見える。マストには細いけれど長い旗が掲げられてあり、それらの旗は航海によつてちぢんでしまつていたが、それでもときどきゆれ動いていた。おそらく軍艦からだろうが祝砲が聞こえてきた。あまり遠くないところを通り過ぎていくこうした軍艦の一隻の砲身が、その鋼鉄の被いの反射光で輝き、安全でなめらかだが水平とはいかない航行に愛撫されるように軽くゆらいでいた。小さな船やボートは、少なくともドアのところからは、遠くにしか見られなかつたが、大きな船のあいだのぼつかりあいた水面に乗り入れていた。だが、そうしたすべての背後にニューヨークの町が立つており、その摩天楼の何十万という窓でカルルを見ていた。実際、この部屋にいと、自分がどこにいるのか、わかるといふものだ。

円テーブルに三人の人が坐つていた。一人は青い船員の制服を着た高級船員であり、ほかの二人は港務局の役人で、黒いアメリカの制服を着ていた。テーブルの上には、高く積み重ねられたさまざまな書類がのつていて、それらを高級船員がまず手にしたペンでぎつとたどり、それから二人の役人に手渡すのだ。役人のほうは、あるいは読んだり、あるいは抜き書きしたり、あるいは書類鞆に入れる。そうでないときには、ほとんどたえず歯で小さい音を立てているほうの役人が、同僚に口授して何か調書に書き取らせている。

窓ぎわの書きもの机には、背中をドアのほうに向けて、小柄な男が一人坐っている。この男は自分の前のどっしりした本棚のなかに頭の高さに並べられてある大きな二つ折り版の書類を扱っていた。その男のそばには、蓋を開けた、少なくともはじめ見ただけでは空<sup>から</sup>のように見える小型金庫が置かれていた。

二番目の窓の前には何も置いてなく、いちばんながめがよかった。ところが、第三の窓の近くには二人の紳士が立つて低い声で話していた。一人のほうは窓のそばによりかかっている。この人もやはり船員の制服を着ていて、短剣のつかをいじっていた。この人が話している相手の人は、窓のほうを向いて、ときどき身体を動かすと、相手の胸を飾っている勲章の列の一部分が見えるのだった。この人は私服を着て、細身の竹のステッキをもっている、そのステッキは両手で腰のところにしっかり当てているため、やはり短剣のように突き出ていた。

カルルは、こうしたすべてを見るだけのひまがなかった。というのは、すぐ給仕が彼ら二人のほうに近づいてきて、お前なんかここにくる人間じゃないんだというような目つきをして、いったいなんの用か、と火夫にたずねた。火夫は、たずねられたのと同じように低い声で、会計主任さんとお話ししたいのだ、と答えた。給仕は、自分としてはそんな願

いはききかねるといふふうに手を振って拒んだが、それでも爪先で歩いて、円テーブルを大廻りして避けて二つ折り版をもっている人のところへいった。この人は——はつきりと見えたのだが——給仕の言葉を聞いて身体を硬直させたが、ついに自分と話したいといっている男のほうを振り向いて、きびしく拒絶の意味をこめて、火夫に向かい、そしてまた念を押すため給仕に向つても、手を振って見せた。すると給仕は火夫のところへもどつてきて、何かを打ち明けるような調子でいった。

「すぐ部屋から出ていきなさい！」

この返事を聞いたあとで、火夫はカルルを見下ろした。まるで、この男こそ無言で自分の悩みを訴えるべき相手だといわんばかりの様子だった。カルルは前後の見さかいかもなく出しやばつていき、部屋を横切つて足早に歩いていった。そのため高級船員の椅子をかすかにかすめるほどであった。給仕は彼をつかまえようとして両腕を拡げ、毒虫を追うように身体をかがめて走つたが、カルルのほうが先に会計主任の机に達した。そこでは主任は、給仕がこの男をつれ去るだろうと考えて、しっかりと態度を保っていた。

むろんすぐに部屋全体が活気を帯びた。テーブルに坐っている高級船員は飛び上がった。港務局の二人の役人は、静かに、しかし注意深くながめている。給仕は、すでに偉い人た

ちが関心を示すようになったところでは自分の出る幕ではない、と思つて、引き下がつてしまつた。ドアのそばの火夫は、自分の助けが必要となる瞬間を緊張して待ち構えている。会計主任はとうとう安楽椅子に坐つたまま大きく右旋回した。

カルルは、これらの人びとの視線にさらされることをちつともためらわずに、例の隠しポケットをごそごそ探して、旅券を取り出した。そして、これ以上自己紹介するかわりに、その旅券を開いたまま机の上に置いた。会計主任はこんな旅券はどうでもいいと考えているらしかつた。というのは、二本の指でそれをわきへどけたのだ。するとカルルは、まるでこの手続きが満足すべき結果で終つたともいうように、旅券をまたポケットにしまひこんだ。

「失礼ですが申し上げます」と、カルルは語り始めた。「ぼくの考えによるとあの火夫さんに不当な扱いが加えられたんです。この船である人の上にいるのはシューバルとかいう人です。あの人自身は、すでにたくさんの船で（あの人はあなたにそれらの船の名前をみんな申し上げることができませんが）完全に満足すべき勤めをしました。勤勉で、仕事のことを大切に考えています。たとえば貿易帆船ほどに勤めが法外にむずかしいわけでないこの船で、なぜあの人がどうもしつくりいかないのか、ほんとうにわかりません。だから、

あの人の昇進を妨げ、あの人の真価がみとめられることをだめにしてゐるのは、ただいわれのない悪口にすぎないのかもしれない。そうでなかったら、この人はかならずや真価をみとめられないでいるはずがないのです。ぼくはこの件についてただ一般的なことだけを申しました。あの人の特別な苦情についてはあの人からあなたに自分で申し上げることでしょう」

カルルはこの演説でここにいるすべての人に呼びかけたのだった。事実、みんなも聞いていたし、会計主任が正しい人間だというのよりも、みんなのなかにだれか正しい人間が一人いるということのほうがいつそうありそうに思えるのだった。さらに、彼がこの火夫に出会つたのはほんのついさっきのことだ、ということは抜け目なくいわないでおいた。ともかく、もし彼が今いる場所からはじめて見た例の竹のステッキをもつた紳士の赤ら顔に当惑させられなかつたならば、もつとうまく話すことができただろう。

「その話は一語一語みんなほんとうです」と、まだだれもたずねないし、まだだれもおよそ彼のほうを見もしないのに、火夫はいつた。火夫のこの早まりすぎた行動は、もし例の勲章をつけた紳士が（そのときカルルにわかつたのだが、ともかくこの人が船長だった）火夫のいうことを聞こうという気にすでになつたらしいのでなかつたならば、大きな失策

だったことだろう。つまり、その人は手をのばして、火夫に向って叫んだのだった。

「こつちにきたまえ！」

その声は、一撃で話をつけようとして断固とした響きをもっていた。今はいつさいが火夫の態度にかかっていた。というのは、彼の件の正しさに関して、カルルは少しも疑ってはいなかった。

ありがたいことに、火夫がすでに世間をいろいろ渡ってきたことが、この機会に示された。非の打ちどころなく落ちついて、小さなトランクから最後の一つかみで一束の書類と一冊のメモ帳とを取り出し、それをもって当然のことのように会計主任をまったく無視して船長のところへ歩みより、窓わくの上に証明書類を拡げた。会計主任には、自分からそこへ出かけていくよりほかに方法がなかった。

「この男は有名な不平屋でして」と、会計主任は説明のためにいった。「機関室よりも会計にしていることのほうが多いんです。この男はあのおとなしい人間のシューバルさえもすっかり絶望させてしまったのです。どうかお聞き下さい！」それから火夫のほうに向きなおっていった。

「君の厚かましきもほんとうに度を越しているよ。君はこれまでに何度、支払い部屋から



ほうり出されたんだ。君のようにまったく、完全に、例外なく不当な要求をやるなら、そんな扱いを受けるのがあたりまえさ。君は何度、そこから会計課へかけこんだのかね。シューバルが君の直接の上役なのだから、君は下役としてあの人とだけで話をつけるように、つて何度おだやかに言い聞かされたのかね。それなのに今度は、船長さんがいられるところなど、どこにまでやってきて、船長さんをわずらわすことを恥じないで、君のくだらない訴えの代弁者としてこんな子供みたいな人までつれてくることをちつともはばからないんだからね。こんな子供さんなんか、私はおよそこの船ではじめて見るんだがね！」

カルルは、無理に自分を抑えて、飛び出すことはひかえていた。だが、すでに船長もそこへきていて、こういった。

「まあ、この男のいうことも一度聞いてやろうじやないか。あのシューバルはどのみち、ゆくゆくは私に対してはあまりに自分勝手なことをやるようになるだろう。といつても、君の有利になるようにこんなことをいつたつもりじやないのだが」

終りの言葉は火夫に向つていつたのだ。彼がすぐ火夫のために尽力するわけにいかないのは当然すぎることだったが、いつさいは順調に進んでいるように見えた。火夫は説明を始め、最初からシューバルを「さん」づけで呼んで自分を抑えていた。会計主任のいなく

なつた机のところ、カルルはどんなによるこんでいたことだろう。彼はただなぐさみのために手紙秤ばかりを何度も手で押えつけていた。——シュューバルさんは不公平です！ シューバルさんは外国人にえこひいきします！ シューバルさんは火夫たちを機関室から出して便所掃除をさせました。これはけつして火夫のやるべき仕事じゃありません！——一度なごは、シュューバル氏の腕前さえもあやしいものだというようなことがいわれた。それはほんとうにもつているよりも、むしろ見かけだけのものだ、というのだ。ここのもので、カルルは力をこめて船長を見つめた。まるで自分が船長の同僚であるかのように親しげな調子であった。これもただ、火夫のいくらかまづい表現法によって船長が火夫にとって不利なような影響をこうむることを避けようとしたのだった。ともかく、いろいろの話からもほんとうのところは聞き取ることができなかつた。そして、船長はまだ、今度は火夫の言い分を最後まで聞いてやろうという決意を眼に浮かべて、前を見ていたけれども、ほかの人びとはじりじりしてきた。そして、火夫の声はまもなく無制限に部屋を支配しなくなつた。そのことはいろいろなことを心配させた。まず最初に、私服の紳士は竹のステッキを動かし始め、低くではあるが、はめこみの床をたたいている。ほかの人びとはむろんとぎどきそちらを見やつた。港務局の役人たちは、急いでいるらしく、また書類を手につ

て、まだいくらか気が散っているようではあるが書類を調べ始めた。高級船員は自分の机をまた身近かによせた。勝ち目があると信じている会計主任は、皮肉まじりに深い溜息をもらしてみせた。ただ給仕だけはみんなが襲われているむら気に取りつかれずにいるように見えた。そして、偉い人たちのあいだに置かれた哀れな男の苦しみに一部分同感して、カルルに向って真顔でうなずいて見せる。まるでそんな表情によって何かを説明しようとしているかのようだ。

そうしているうちに、窓の前では港の風景がつきつきとくりひろげられた。一隻の平たい貨物船が、ころがり出さないように妙なふうに積み重ねられた樽たるの山をのせて、この船のそばを通り過ぎていった。そのためにこの部屋はほとんどまっ暗になってしまった。小さなモーターボートが、もしカルルにひまがあつたらよく見ることができただろうが、舵のところにもつすぐに立った男の両手の動きに従いながら一直線に疾走していく。奇妙な形をした浮遊物がときどきじつとしてはいない水面からひとりで浮かび上がっては、すぐまた波をかぶって、驚いている視線の前で沈んでしまう。遠洋航海の汽船のボートは、懸命に漕こいでいる水夫たちによって進められていくが、船客でいっぱいだ。船客たちはボートのなかで、押しこめられたままになって、静かに、期待にみちて坐っているが、何人

かは移り変つていく光景を見ようとして頭を廻さないではいられない。終わることのない動き、落ちつくことのない水によつて途方にくれている人びとと彼らの仕事との上に移された落ちつきのない動揺だ！

だが、いつさいは急ぐように、はつきりするように、くわしく述べるように、と警告しているのだ。ところが、火夫は何をやったのだろうか。なるほど汗を流して話してはいる。窓の上の書類はふるえる両手ではもうずっと前から支えていることができなくなっていた。四方八方からシューバルに関する不平が彼に流れてきている。そのどれもが彼の考えによれば、このシューバルを完全に葬り去るのに十分だ、というのだ。ところが、彼が船長に示すことができたのは、すべてのことをごちやませにした悲しむべき混乱だけだった。竹のステッキをもつた紳士は、さつきから天井に向つてそつとパイプをふかしている。港務局の二人の役人はすでに高級船員を自分たちの机につかまえ、相手をまた離しそうには見えない。会計主任は明らかにただ船長が落ちつき払っているために口をはさむことをひかえているのだ。給仕は気をつけの姿勢でいつでも火夫に関する船長の命令に従おうと待ち構えている。

そこでカルルはもう何もしままでいることができなかつた。そこでゆっくりと船長

たちのほうに歩いていき、歩きながらそれだけ素早く、どうやったらいちばんうまくこの一件に口を出していくことができるだろうか、と考えてみた。もうほんとうに潮時しおときだった。もうほんの少したつたら、彼らは二人でうまく事務室から飛び出すことができるのだ。船長はいい人らしいし、それにちようど今、カルルにはそう思われたのだが、自分が公正な上役であることを示そうとする何か特別の理由があるのだ。だが結局のところ、船長は徹底的に弾ひくことができる楽器ではないのだ。——そして火夫は、なるほど限りなく憤いつている内心からではあるが、まさにそういうものとして船長を扱っているのだ。

そこでカルルは火夫に向つていった。

「もつと簡単に話さなくちや。もつとはつきりわかるように。船長さんは、あんたがお話しているようでは、もつともと思つては下さらないですよ。船長さんが機関士たちや伝令係たちの名前とか洗礼名とかまでご存じで、あなたがそんな名前を言いさえすれば、すぐにだれのことかおわかりになるものですかね。あんたの苦情を整理して、まずいちばん大切なを申し上げ、ほかの一段下のものとして申し上げるんですね。そうすればおそれなく、たいていのはただいいことももう必要じゃなくなるでしょう。あんたはぼくにはいつだつてあんなにはつきりと話して聞かせたのに！」もしアメリカでトランクを盗む

やつがいるなら、ときどきはうそをついてもいいわけだ、と彼は自分のうその弁解のために考えた。

これが役に立ったならばいいのに！ もう遅すぎたんじゃなかったか。火夫は知っているカルルの声を聞くと、なるほどすぐに話を中断はしたが、男としての名誉を傷つけられたこと、恐ろしいさまじまな思い出、現在の極端に苦しい立場、こういったことのために涙を流し、その涙にすっかり曇ってしまった彼の眼ではすでにカルルをうまく見わけることができなくなっていた。今になってからどうして——カルルは今黙っているこの男を前にして、無言のうちにこのことを見抜いていた——、今になってからどうして突然、彼の話しかたを変えることができよう。火夫にとつては、いうべきことはみんないつてしまったのに、少しもそれを見とめてはもらえないように思えるし、また一面では、まだ何もいつていないのだが、さらにすべてのことを聞いてくれと今は求めることができないように思えてもいるのだ。そして、こうしたときに、さらに自分のただ一人の味方であるカルルが口を出してきて、自分は教訓を与えようとする。ところが、教訓のかわりに、いつさいが、いつさいがもうだめなのだ、と教えているのだ。

「窓からなかなかめていないで、もつと早くここへくればよかった」と、カルルは自分

にいつて、あらゆる希望の綱は切れたということを示す合図に、火夫の前で顔を伏せ、両手でズボンのぬい目のところをたたいた。

ところが火夫はそれを誤解して、きつとカルルの態度に何か自分に対するひそかな非難を嗅ぎ出したのだろう。そして、その非難をカルルに思いとどまらせようという善意の意図から、自分の行為の仕上げといわんばかりに今度はカルルと口論をし始めた。円テーブルの人たちは、自分たちの重要な仕事のじやまをしているこんな無益なさわぎにさつきから腹を立てていたし、会計主任はだんだんと船長の忍耐が理解できなくなつて、今にも爆発しそうになつていた。給仕はふたたび紳士がたの仲間に入つて、火夫をけわしい目つきでじろじろ見ていた。最後に竹のステッキをもつた例の紳士は、船長もときどきは親しげな視線を送つていたのだが、もう火夫に対してすっかり冷淡になつてしまつていた。それどころか嫌気がさしてしまい、小さなメモ帳を取り出して、どうもまったく別な用件をあれこれ考えているらしく、メモ帳とカルルとのあいだに眼をあちこちと移していた。

「わかっていますよ、わかっていますとも」と、カルルはいった。彼は今では自分に向けられた火夫の長広舌を避けようと骨を折つていた。それでもあらゆる争いの合い間にまだ火夫に対する友情の微笑を忘れてはいなかつた。

「あんたのいうことはもつともだ。正しい。ぼくはそれを疑ったことは一度もありませんとも」彼はなぐられることを恐れるあまり、火夫の振り廻している両手をとめたかった。とはいえ、もつとしたいことといえ、火夫を片隅へ追いこんで、ほかのだれにも聞かれないように、一こと二こと、低い声でなだめる言葉をささやいてやる、ということであった。ところが、火夫はまったく羽目をはずしていた。カルルは今ではもう、火夫はせつばつまれば絶望的な力を振りしぼってここにいる七人の男たちを征服するかもしれない、などということを考えて、その考えから一種のなぐさめをくみ出し始めてさえいるのだ。とはいつても、書きもの机の上には、そこをちよつと見ただけでわかるのだが、電気装置のたくさんの押しボタンのついた台があった。それに手をかけ、ただ簡単にそれらのボタンを押しさえすれば、敵意をもつ人間たちであふれている通路が縦横に通じているこの船全体に暴動をひきおこすことができるのだ。

そのとき、あんなに無関心であった竹のステッキをもった紳士が、カルルに近づいてきて、ひどく高い声ではなかったが、火夫のどなり散らしている叫び声を圧してはつきりわかるように、「いったい、君はなんていう名前ですか」と、たずねた。この瞬間、まるでだれかがドアのうしろでこの紳士の発言を待っていたかのように、ノックする音がした。



給仕は船長のほうを見た。船長はうなずいた。そこで給仕はドアのところへいき、ドアを開けた。ドアの外には古いカイゼル服を着て、中肉中背の男が立っていた。その外見からいうとほんとうは機関の仕事に適してはいなかった。だが、これがシューバルだった。あの種の満足を表わしているみんなの眼で、カルルはこの男がシューバルだということに気づかなかつたとしても（船長さえ満足の気持からのがれてはいなかった）、火夫の様子でそれとわかつて驚かないわけにはいかなかつただろう。なにしろ火夫は、力のこもった腕に拳をしつかと固めて、まるでこの固めた拳こそいちばん大切なものであり、そのためには自分の生命のすべてを犠牲にする覚悟でいるように思われるのだった。そこに彼の力のすべてがこもっていて、また彼の身体をおよそきちんと起こさせている力もその拳にこもっていた。

こうして敵が現われたわけだが、礼装を着てこだわりなく元気で、わきの下に帳簿を抱えている。おそらく火夫の賃金表と労働報告書とであろう。そして、一人一人の気分をまづ何より先にたしかめようとしていることをひどく露骨に顔に出して、順を追ってみんなの眼をながめていた。七人ともすでに彼の味方であった。というのは、船長はさつきは彼に対してある文句をもっているか、あるいはただそれを口実としているかしたのであるが、

火夫が自分に対して害を与えたあとの今となつては、おそらくシューバルを非難することはほんの少しでもないように見えた。この火夫のような男に対しては、いくらきびしい扱いをしても十分ということはないのだ。そして、もしシューバルに対して非難すべきものがあるならば、それは彼が火夫の反抗心をこれまでのうちに打ち破ることができず、そのために火夫がきようはあえて船長の前にまで現われるにいたつたという事情そのものであつた。

ところでおそらくこう考えることもできた。火夫とシューバルとの対立は、上級の法廷を前にして表われるような効果を、この人びとを前にしてもきつと表わさないではないだろう。というのは、シューバルがいくらうまくよそおうことができたところで、しかしそれを最後までもちこたえることはできないにちがひなかつた。彼の悪がほんの少しひらめいただけでも、それをこの人たちにはつきりと見させるのに十分だろう。その手はずを進めてやろうとカルルは思った。彼はこれまでについてながらここにいる一人一人の洞どうき察力、弱点、気まぐれなどを知っていた。そして、この観点からいうと、これまでここで過ごした時間はけつしてむだではなかつたわけだ。火夫がもつと事態に応じるだけの才覚をもつていたらよかつたが、しかしこれは完全に闘争能力をもたないように見えた。

もし彼にシュールバルを向かい合わせたら、きつとこいつの憎い頭蓋骨ずがいこつを拳でたたくことはできただろう。しかし、ほんの一、二歩だけでもシュールバルのほうに向って自分から進んでいくことは、きつとほとんどできなかつたろう。シュールバルが自分から進んでくるのではなくとも、船長に呼ばれて最後にはやってこないわけにはいかないという、ひどくやさしく予想できることを、カルルはなぜ予想しなかつたのだろう。カルルと火夫との二人が実際にやってしまったように、救いがたいほど手ぶらで、いとも簡単にドアがあるとところへ入るなどというのではなく、なぜカルルはやってくる途中、火夫とくわしく戦闘計画を相談しておかなかつたのだろうか。いったい火夫はものをいうことができるだろうか。これはいちばんうまくいった場合だけに行われるのではあるが、もしくはわしい訊問が行われるとしても、その場合に必要なイエスやノーを火夫はいえるだろうか。火夫はそこに突つ立っている。両脚を開いて、膝は不安定であり、頭は少しばかり上げている。開いた口を通つて空気が出入りしていて、まるで胸のなかにはその空気を使う肺がないかのようだ。

とはいえ、カルルはおそらく故郷にいるときは一度もなかつたほど、力強く、頭もさえていけるように感じられた。彼が外国でりっぱな人たちを前にして善のために闘い、まだ勝

利をもたらずまでにはいたっていないにしても、もう最後の征服の準備が完全にできているのを、彼の両親がもし見ることができたならば、なんといったことだろう。両親は彼についての意見を修正するだろうか。自分たちのあいだに彼を坐らせて、ほめてくれるだろうか。彼らにとっても従順な彼の眼のうちを一度は、一度は見入るだろうか！ これはどうもたしかとはいえない問いだし、またそんな問いを提起するにはまったく不適當な今の瞬間なのだ！

「私がやってきたのは、火夫が私の不正直さということを何か非難しているからです。料理場のある女の子が、この男がここへやってくるところを見かけた、と私に言いました。船長さん、並びにみなさん、私はどんな非難でも、私の書類を使って、あるいは必要の場合にはドアの前に立っている偏見のない公平な証人たちの陳述によって、否定し去る用意があります」シューバルはこう語った。

これはなるほど一個の男のはつきりした話ではあった。聞き手たちの顔つきに表われた変化によると、彼らは長い時間かかつてはじめて人間の声をまた聞いているのだ、と思うことができるだろう。むろん彼らは、このりっぱな話にさえもいろいろ欠陥があるということに気づいてはいなかった。なぜ彼が思いついた最初の具体的な言葉が〈不正直さ〉と

いうものなのだろうか。おそらく、彼の国民的偏見などということではなくて、非難はこの点に向けられなくてはならなかったのではないだろうか。料理場の女の子が火夫が事務室へいく途中だったのを見て、シューバルはそれを聞くとただちになんのためにいくのかわかったというのか。彼の頭をそんなに鋭敏にしたのは、彼自身の罪の自覚ではないのだろうか。そして、彼はすぐ証人たちをつれてきて、しかもその証人たちが偏見がなくて公平だというのか。ペてんだ、ペてん以外の何ものでもないのだ！ それなのに、この人たちはそれを黙って聞いており、その上にそれを正しい態度とみとめているのか。なぜ料理場の女の子の報告から彼がここにつくまでのあいだに、疑いもなくひどく時間がかかったのか。その目的はただひとえに、それによつて火夫が要領をえない話でこの人たちを疲れさせ、そのためにこの人たちが明晰な判断力を失ってしまう、ということを狙ったのだ。この人たちの明晰な判断力こそ、何よりもシューバルが恐れなくてはならないものなのだ。彼はきつとすでに長いあいだドアのむこうに立っていたのであり、あの人のどうでもいような質問から考えるのに、火夫がもうやられてしまった、と期待できる瞬間になつてやつとドアをノックしたのではなかつたらうか。

いっさいは明らかであつた。そして、シューバルによつても意に反してそういう事情が

述べられたのだった。だが、ほかの人たちに対してはもっと別なふうに、もっとわかりやすく教えてあげなければならぬ。彼らは目をさましてやる必要があるのだ。だからカルル、急ぐんだ、証人たちが現われ、いつさいをうその洪水でわからなくしてしまう前に、少なくとも今の時間を十分に利用するんだ。

だが、そのとき船長は手で合図してシュューバルを黙らせた。シュューバルはその合図を受けるとすぐに——というのは、彼の一件がほんのしばらくのあいだ中断されたように見えたからだ——わきへどいて、早くも彼の味方についた給仕と低い声で話し始めた。そして、火夫とカルルとのほうに横眼を使ったり、まことに確信ありげな手の動作をしたりしないではいかなかった。シュューバルはこうやってこのつぎの大演説の練習をやっているらしかった。

「この青年に何かおたずねになろうとされたのではありませんか、ヤーコプさん？」船長はみんなが黙りこくっているなかで、こう竹のステツキの紳士に向っていった。

「そうですとも」と、紳士は小さくうなずきながら、船長が気をきかせてくれたことに感謝していった。それからもう一度、カルルに向ってたずねた。

「君はいつたいなんていう名前だね？」

こんなしつっこい質問者というこの突発事を早く片づけることがこの重大な本筋と関係ありと考えたカルルは、彼の習慣となつているように旅券を見せて自己紹介すると、まずはじめにその旅券をポケットのなかから探さなければならぬので、そんなことはやめてしまい、ただ手短かに答えた。

「カルル・ロスマンです」

「それじゃあ」と、ヤーコプと呼ばれたこの人はそういつて、ほとんど信じられないといったふうに微笑しながら、あとしざりした。船長も、会計主任も、高級船員も、そればかりか給仕さえも、カルルの名前のために度はずれな驚きをはつきりと示した。ただ港務局の二人の役人とシューバルとだけが、無関心といった態度をとつていた。

「それじゃあ」と、ヤーコプ氏はくり返して、いくらかこわばった足取りでカルルのほうへ近づいてきた。「それなら、私はお前の伯父のヤーコプで、お前は私の甥おいだ。さつきから、そんなことは少しも知らなかつた！」そう船長に向つていうと、つぎにカルルを抱いて接吻した。カルルは無口のまま、すべてされるままになつていた。

「あなたのお名前は？」と、カルルは身体をゆるめられたと感じたあとで、なるほどうれしそうにはあるが、まったく無感動にたずねた。そして、この新しいできごとが火夫に

対して及ぼすだろうと思われる結果を予測しようと努めた。

「これはあなたにとつての大変な幸運ですよ」と船長はいった。船長は、カルルの紳士に対する質問によつてヤーコプ氏という人物の品位が傷つけられたと思つたのだつた。ヤーコプ氏は窓に向つて立つていた。自分の興奮した顔をほかの人びとに見せなくてもすむように、ということらしい。そして、その上、顔をハンカチで軽くたたいてゐる。「あなたに伯父様として名のられたのは、上院議員エドワルト・ヤーコプ氏です。これからは、おそらくあなたのこれまでの期待とはちがうことでしょうが、輝かしい将来があなたを待っています。今この最初の瞬間のうちにそのことを呑みこもうとなさい。そして、しっかりとしなさい！」

「ぼくはなるほどアメリカにヤーコプという伯父さんをもつてはいます」と、カルルは船長に向つていった。「でも、ぼくが聞きあやまつたのでなければ、ヤーコプというのはこの上院議員さんの姓でしたね」

「そうですよ」と、船長は期待にみちていった。

「ところで、ぼくの伯父さんのヤーコプは、ぼくの母の兄ですが、洗礼名がヤーコプっていうんです。で、姓はむろん母のと同じはずですが、母は旧姓ベンデルマイヤーっていう



んです」

「みなさん！」と、窓ぎわで気をとりしずめていた場所から元気よくもどってきた上院議員は、カルルの説明に関連して叫んだ。港務局の役人を除いて、みんなが笑い出した。あつる者は感動しているようであり、あつる者はどういうつもりなのかわからなかった。

「ぼくのいったことは、けつしてそんなに滑稽なことではないのに」と、カルルは思った。「みなさん」と、上院議員はくり返した。「みなさんは、私の意志とみなさんご自身の意志とに反して、つまらぬ家庭的一幕に立ち会われているわけです。そこで私としては、みなさんにご説明申し上げないわけにはいきません。というのは、私の考えますところでは、ただ船長さんだけが」——こういうと、二人はたがいに目礼を交わすのだった——「事情をすつかりご存じなのです」

「今のところぼくはほんとうにどの一ことにも注意して聞かねばならないぞ」と、カルルは自分に言い聞かせ、ふと横をながめると火夫の姿に生気がもどり始めているのをみとめて、よろこんだ。

「私は長年にわたるアメリカ滞在のあいだに——この滞在という言葉はむろんここでは一人のアメリカ市民にとつてはびつたりするものではないのですが。なにしろ私は真底から

アメリカ市民でありますから——、で、長年にわたり、私はヨーロッパの親戚とはまったくつながりをもたずに暮らしていました。その理由は、第一のはここで申し上げるにふさわしいものでなく、第二の理由をお話することは、私にとってあまりにも迷惑なのです。おそらく私の甥にそれを語ってやらなければならぬときがくると思いますが、そのときのことか心配なくらいです。話すときには、残念ながらこの子の両親とその一族について率直な言葉を語ることが避けられないでしょう」

「これはぼくの伯父さんだぞ、疑う余地はない」と、カルルは自分に言い聞かせ、耳を傾けていた。「おそらく名前を変えたのだろう」

「私の甥は今では両親から——事の真相を示す言葉を使うことにしましょう——あつさり捨てられたのです。ちょうど、猫がしやくにさわると、ドアの前に投げ出されるようにです。私の甥が何をやってこんなふうな罰を受けたのか、私はとりつくろって申すつもりはありません。しかし、甥のあやまちは、それを申しただけですでに十分弁解になる理由を含んでいるようなたぐいのものなのです」

「これは聞く価値があるぞ」と、カルルは考えた。「でも、伯父さんがあれをみんなに話すのは困るぞ。ところで、伯父さんはあれを知っているはずはないんだが。いったい、ど

「こから聞いたんだらう？」

「つまり」と、伯父は語りつづけ、ちよつと身体を傾けて前に踏んばっている竹のステッキにもたれた。それによつて実際、この件から不必要ないかめしきを取り除くことに成功した。そうでなければこの件はきつとそんな不必要にまじめな調子を帯びたことだらう。

「つまり、甥はヨハンナ・ブルマーという女中に誘惑されたのです。これはおよそ三十五歳ほどの女です。このへ誘惑された」という言葉で甥の気を悪くさせたくはないのですが、ほかの同じようにびつたりした言葉を見つけ出すことは困難なのです」

すでに伯父のかなり近くへ歩みよつていたカルルは、この話の与えた印象をこの場にいる人びとの顔から読み取ろうとして、このとき振り向いてみた。だれも笑う者はなく、みんな忍耐強く、まじめそうに聞いていた。結局のところ、最初の機会が生じたというときに、上院議員の甥のことを笑うわけにはいかないのだ。むしろ、火夫がほんのちよつとではあるがカルルにほほえみかけたといえたかもしれない。だが、これは第一に彼が新しい生氣を取りもどしたしるしとしてよろこばしいことであり、第二にはもつともなことでもあった。なぜなら、実際カルルはあの船室で、今ではこんなにもひろまってしまったこの件を極秘にしておこうとしたからだつた。

「ところでこのブルマーが」と、伯父は語りつづけた、「甥の子供を生ましました。じょうぶな男の児で、洗礼のときヤーコプという名をつけられました。疑いもなく不肖ふしょうこの私を頭においてのことであります。この私のことは、甥がきつとただまったくさりげなく話しただけだと思われませんが、それでさえその女の子に少なからぬ感銘を与えたにちがいません。幸いなことに、と私はいわれないわけにまいりません。というのは、両親は養育費の支払いとか自分たちの身にまで及ぶそのほかのスキャンダルとかを避けるために——私は強調しておかねばなりません、あちらの法律も、また両親のそのほかの事情も知りません——で、養育費の支払いとスキャンダルとを避けるために、彼らの息子、つまり私の甥をアメリカへ運ばせたのです。ごらんのとおり、こんな無責任きわまる不十分な支度しかしてやらずにです。それゆえ、この子は、もしこのアメリカにしろうじて生き残っている神意のしるしと奇蹟とがなかったならば、自分の身ひとつをたよりにしなければならず、きつとたちまちのうちにニューヨーク港の裏町のどこかで零落したことでしよう。もしその女中が私宛ての手紙、しかもそれは長いことあちらこちらとさまよっておといやつと私の手に入ったのですが、その手紙のなかで一部始終を知らせ、それに甥の人相のことや賢明にも船の名前も添えて書いてよこさなかったならば、そんなことになったかも

しません。もしみなさんを面白がらせるつもりならば、その手紙の二、三の箇所を——  
——といって、伯父はこまかな字で書かれた大きな二枚のレターペーパーをポケットから取り出し、それを振って見せた——「ここで朗読することもできるでしょう。この手紙はきつと効果があるでしょう。つねに善意からではあるが、いくらか単純なずるさと、子供の父親である甥に対する大きな愛情とをもつて書かれているからです。だが、事情を説明するためには必要である以上にみなさんを面白がらせるつもりはありませんし、また甥を迎えるにあたって、おそらくまだ残っている甥のいろいろな感情を傷つけるようなことをやりたくもありません。甥は、もしそうしたいなら、すでに彼を待っている部屋の静けさのなかでこの手紙を読んで、それを知ればいいのですから」

だが、カルルはその女中に対してなんらの感情も抱いてはいなかった。いよいよ遠くへ退いていく過去の、ひしめき合う思い出のなかで、その女は台所で戸棚のそばに坐っている。その棚の板の上に両肘をついている。彼が父親のために水を飲むコップを取りにと、母親に頼まれたことをやるためにとかでときどき台所へいくと、女は彼をじつと見るのだ。ときどきは台所の戸棚のわきで変な姿勢で手紙を書いており、カルルの顔を見て靈感を引き出すのだ。ときどきは片手で両眼を被っていた。そういうときは、いくら彼

女に呼びかけても、彼女の耳にはとどかなかつた。ときどきは台所のわきの自分の小さな部屋でひざまずいて、木の十字架に祈っていた。そういうときには、カルルはただおぼろげにしながら、通りすがりに少し開いているドアのすきまを通して女の姿を見るのだった。

ときどきは、台所で走り廻って、カルルが彼女の道をふさぐと、魔女のように高笑いしながら、跳び下がった。ときどきは、カルルが入っていくと、台所のドアを閉めて、カルルがどいてくれと要求するまで手でドアの取手を押えていた。ときどきは、カルルが全然欲しくもない品物をもつてきて、無言でそれを彼の両手のなかに押しつけるのだった。ところが、あるとき、「カルル」といって、思いがけないその呼びかけにまだ驚いている彼を、しかめ面をして溜息をもらしながら自分の小さな部屋へつれこみ、部屋に鍵かぎをかけた。

女は絞め殺さんばかりにカルルの首に抱きつき、服を脱がせてくれと頼みながら、自分のほうでも実際に彼の服を脱がせ、ベッドの上に寝かせた。まるで今からは彼をだれの手にもやらす、この世の終りまで、なでいつくしみたいといわんばかりだった。「カルル、おお、あたしのカルル！」と、女は叫び、彼をながめて、彼を所有していることをたしかめようとするかのようだ。一方、彼のほうは何一つ眼に入らず、女が特別彼のために積み重ねたらしいたくさんの暖かいかけぶとんのなかで不快に感じていた。それから女は彼に

より添って寝て、彼の秘密を何か聞きたいといったが、彼が何もいうことができないので、冗談でなのか本気なのかわからないが怒って、彼の身体をゆすり、耳をあてて心臓の鼓動を聞き、同じように聞いてみるという自分の胸をさし出した。ところが、女はカルルにそうさせることができないと、自分の裸の腹を彼の身体に押しつけ、手で彼の両脚のあいだを探った。あんまりいやらしいので、カルルは頭と首とを枕から振りはずしてしまった。それから女は、腹を二、三度彼に向って押しつけた。——カルルには、まるで女が自分自身の一部であるような気がした。おそらくこの理由から恐ろしくみじめな気持ちに襲われたのだろう。女のほうから何度も何度もまたのあいびきをせがまれたあとで、カルルは泣きながら自分のベッドへもどった。これだけのことだったが、伯父はそれから大きな物語をつくり出すことを心得ていた。で、その女中が伯父のことを考えて、伯父に彼の到着を知らせたというわけだった。じつにいいことをやってくれた。自分としてもきつとその女にいつかむくいてやるだろう、と伯父はいった。

「で今、私がお前の伯父かそうでないか、お前の口からはっきり聞こう」と、上院議員は叫んだ。

「あなたはぼくの伯父さんです」と、カルルはいつて、彼の手に接吻し、そのかわりに額

に接吻してもらった。「あなたに会って、ぼくはとてもうれしいです。でも、ぼくの両親が伯父さんについて悪いことだけ話していると思うなら、まちがいです。でも、それは別問題としても、あなたの話にはいくらかのまちがいが入っていました。つまり、実際には万事がそんなふうに起つたものではありません。けれども、伯父さんはほんとうにこのアメリカからでは事柄に十分な判断を下すことは無理です。それに、このみなさんにあまり関係はない件のこまかな点で少しばかりまちがったことを教えられても、そうたいして害にはならないと思います」

「よくいった」と、上院議員はいつて、明らかに同感を示している船長の前にカルルをつれていき、たずねた。「私はすばらしい甥おいぢをもっているでしょう？」

「甥御さんとお知合いになれまして、私は大いによろこんでいます」と、船長はただ軍隊の訓練を受けた人たちだけがやるようなお辞儀をしながらいった。「こうしためぐり合いの場所を提供できましたことは、本船の光栄とするところです。しかし、三等船客としての航海はきつとひどかったことでしょう。しかし、どなたが乗船しておられるかわかりませんのでね。ところで、われわれは三等の人たちの航海をできるだけ楽にしてあげるように、ありとあらゆることをやっています。たとえば、アメリカ船よりもずっと多くのこと



をやっております。けれども三等の航海をたのしみにするということまでには、なんといつてもまだいたっていません」

「ぼくにはちつとも悪いことなんかありませんでした」

「甥にはちつとも悪いことなんかなかったそうですぞ」と、上院議員は大きな声で笑いながらいった。

「ただトランクだけはどうも失くして——」と、いいかけて、起つたこと、まだやることで残っていることをみんな思い出しながら、あたりを見廻し、この場にいる人たちがみな黙って尊敬と驚きとのために彼に視線を注いでいるのをながめた。ただ港務局の役人たちの様子には、彼らの自己満足しているきびしい顔から見抜くことができる限りでは、こんなに工合の悪いときに自分たちがやってきたと残念がっているのが見られた。そして、今自分たちの前に置いてある懐中時計のほうが、彼らにはどうもこの部屋のなかで起つていくこと、そしておそらくこれからなお起るかもしれないことよりも重要であるらしかった。

船長のあとで自分の関心を表わした最初の人物は、奇妙なことに火夫だった。

「心からお祝いを言いますぜ」と、彼はいつて、カルルの手をにぎった。それによって相

手をみとめているというようなことを言い表わそうとしたのだった。つぎに同じ言葉で上院議員に向かおうとしたとき、上院議員は火夫がそれによって自分の分を超えたことをやろうとしているといわんばかりに、あとしざりした。火夫もすぐにやめてしまった。

ところが、ほかの人びとも今はやるべきことがわかったとみえて、たちまちカルルと上院議員とのまわりにさわぎを起こした。そこで、カルルはシュバルからさえ祝いの言葉をかけられ、それを受け、その礼を述べた。ふたたび静けさが立ちもどったなかで、最後の番で港務局の役人たちがやってきて、英語で二語だけいったが、これが滑稽な印象を与えた。

上院議員はすっかり上機嫌で、よろこびを完全に味わいつくすため、どうでもいいようなことを思い出し、ほかの人びとも思い出させようという気になっていたが、それはむろんすべての人びとによって我慢して聞かれただけではなく、関心をもって受け入れられた。そこで彼は、女中の手紙のなかに書いてあったもともちじむしいカルルの人相の特徴を、きつとあとでちよつと使うことになるだろうと思つてメモ帳に書き入れていたのだ、といつてみんなの注意を喚起した。ところで、彼はさっきの火夫の我慢できないおしやべりのあいだに、ただ気をそらすためだけの目的でメモ帳を取り出し、むろん探偵式に

いえば正しくはない女中の観察点をカルルの外見と遊び半分に結び合わせようとしたというのだった。

「私の甥はこんなふうに見られているんですよ！」と、彼はもう一度祝いの言葉を受けたいと思っっているかのような調子で話を結んだ。

「火夫はこれでどうなるでしょう？」と、カルルは伯父の最後の話がすむと、たずねた。

彼は、自分の新しい立場では、なんでも思ったことをいってもいいのだと考えた。

「火夫はあれにふさわしいようになるだろう」と、上院議員はいった。「それに、船長さんがよいと思われるようになるだろうよ。もう火夫のことは十分だし、十分すぎると私は思うね。ここにおられるみなさんもきつと私のこの意見に賛成されるだろう」

「正義に関する件においては、そんなことは問題じゃありません」と、カルルはいった。

彼は伯父と船長とのあいだに立っていたが、おそらくこのような位置に立っていることに影響されて、決定を自分の手中ににぎっているように思った。

それにもかかわらず、火夫はもう自分のために何も望んでいないらしかった。両手を半分ズボンのバンドに突っこんでいた。彼が興奮して動いたためにそのバンドは模様のないシャツの片はじといっしょに外へ見えていた。そんなことは少しも彼の気にはならない。

彼は自分の悩みをすっかり訴えてしまったのだから、自分が身につけている一つ二つのぼろを見られたってかまわないし、追い出されたってかまわないのだ。ここでは階級のいちばん下の給仕とシューバルとの二人が、自分を追い出すというこの最後の好意を果たしてくれるものと、彼はすっかり思いこんでいた。そうすればシューバルは気が落ちつくだろうし、もう会計主任がいったように絶望なんかすることはないだろう。船長はルーマニアばかりを雇うことができるだろう。船じゅうどこでもルーマニア語が話されることになるだろう。そうすればおそらくいつさいがもつとよくなるだろう。火夫が会計課でoshiやべりすることはもうないだろう。ただ自分の最後のおしやべりだけをかなりなつかしい思い出のうちにとどめることだろう。なぜなら、上院議員がはつきりと断言したように、自分のおしやべりが甥を認知する間接のきっかけとなつたからだ。ところでこの甥はさつき何度も自分のために役に立つてくれようとした。だから、伯父との再会に際して自分が役立ったことに対する礼はもうずっと前にあらかじめすませてあつたようなものだ。そこで火夫には、今何かをカルルから要求するなどということは全然思いつかなかつた。それに、カルルが上院議員の甥であろうと、とうてい船長ではないのだ。ところで、船長の口からは最後にひどい言葉が吐き出されるだろう——こんな自分の考えを追って、火夫は実

際にもカルルのほうを見ないように努めていたが、残念ながら自分の敵だけがいるこの部屋では、カルル以外に彼の眼を休める場所がなかった。

「事態を誤解してはいけないね」と、上院議員はカルルに向っていった。「おそらく正義に関する問題であろうが、同時に規律の問題でもあるのだ。両方とも、そしてことに後者はここでは船長さんの判断にまかされているのだ」

「そうだ」と、火夫がつぶやいた。それに気づき、それがわかった者は、奇妙な微笑をもちた。

「だが、船長さんはその上、ちようどニューヨークに到着したばかりで、信じられないくらいたまっているにちがいない公務をもつていられるのだよ。だから、もう私たちが船を去る潮時だ。余計なことをしてまだ何かまつたく不必要な首の突っこみかたをやつて、二人の機関士のつまらぬけんかを大事件にしないためにだな。ともかくお前のやりかたはすつかりわかる。だがそれだからこそ、急いでお前をここからつれ去る権利が私にあるというものだ」

「すぐあなたがたのためにボートを下ろさせましょう」と、船長はいった。カルルが驚いたことに、疑いもなく伯父の自己謙遜けんそんと見られる言葉にほんの少しでも異を立てること

をやらないのだ。会計主任はあわてて書きもの机のところへいき、船長の命令をボート係に電話で伝えた。

「時間が迫っているんだ」と、カルルは自分に言い聞かせた。「でも、みんなを侮辱することなしでは、ぼくは何もすることができないぞ。だが今は、伯父がやつとぼくを見つけただから、伯父を見捨てるわけにはいかない。船長はなるほど礼儀正しいけれど、でもそれだけのことだ。規律のこととなると、船長の礼儀正しさも忘れられてしまう。伯父はたしかに心からああ船長に話したんだ。シューバルとは話したくない。あの男に握手の手を渡したことも残念なくらいだ。そして、ここにいるそのほかの連中はみんなくずだ」

そして、こんなことを考えながらゆつくりと火夫のほうへ歩いていき、その右手をバンドから取って、自分の手のなかにもてあそびながらおさめていた。

「どうしてあんたは何もいわないんです？」と、彼はたずねた。「どうしてみんな黙って受け入れているんです？」

火夫は、いうべきことをどう言い表わしたらいいのか探しているように、額にしわをよせた。それからカルルの手と自分の手の上に眼を落していた。

「あんたは不当な扱いを受けているんですよ。この船のだれよりもね。それはぼくもちや

んと知っているんだ」

そして、カルルは火夫の指のあいだに自分の指をさし入れたり抜いたりした。火夫のほうは、いくらよろこんだってだれも自分のことを悪く取ることがないだろうと思われる歓喜に襲われたように、輝く眼でまわりを見廻している。

「でも、あんたは自分の身を守らなくちやいけない。イエスとノーとはつきりいわなくちやいけないですよ。そうでないと、人びとは真相が全然わからないんだから。ぼくのいうことを聞くつて、約束して下さいよ。だって、ぼく自身はいろいろな理由から、もう全然助けてあげることができないだろうと思うんです」

それから、カルルは火夫の手に接吻しながら、泣いた。そして、ひびだらけの、ほとんど血のかよっていないようなその手を取つて、自分の両頬に押えつけた。まるで思いきらなければならぬ宝のようだった。——ところが伯父の上院議員が彼のそばへきて、強制の様子はほんの少ししか見せなかつたが、彼を引っ張つていった。

「火夫がお前の心に魅入つたらしいね」と、伯父はいつて、意味ありげな面持おももちでカルルの頭越しに船長のほうを見やった。「お前はひとりぽっちだと感じていたんだ。そのときお前は火夫を見つけたんで、今はあの男に感謝しているんだ。それはまったく感心なこと

だよ。でも、もう私のために、あまりやりすぎないようにするんだ。お前の地位を理解することを学ばなければいけないぞ」

ドアの前でさわぎが起った。叫び声が聞こえ、まるでだれかが乱暴にドアへぶつけられたようであった。いくらか荒れ狂った様子で一人の水夫が部屋に入ってきた。そして女中のエプロンを身体に巻きつけていた。

「外にたくさんいますよ」と、その男は叫んで、まだ人ごみのなかにいるかのよう<sup>ひじ</sup>に肘あたりを突くような恰好をした。とうとう正気に返って、船長の前で敬礼しようとしたが、女中のエプロンに気がつき、それを引きはがして床に投げ、叫んだ。

「まったく不愉快だ。女中のエプロンなんか巻きつけやがって」

だが、靴のかかとを音を立てながら合わせ、敬礼した。だれかが笑おうとしたが、船長はきびしい口調でいった。

「だいたいいい機嫌のようだね。だれが外にいるのかね？」

「私の証人たちです」と、シューバルは歩み出ながらいった。「彼らの不穏当なふるまいはどうかお許しのほどを。水夫たちは航海を終えると、ときどき気持ちがいのようになるんです」



「すぐなかへ入れてくれ」と、船長は命令し、すぐ上院議員のほうへ振り向くと、親しげにだが口早にいった。「上院議員さん、どうか甥御さんとごいっしょにこの水夫のあとをついていって下さい。この男があなたがたをボートへご案内します。親しくあなたさまとお知合いになれまして、大変うれしく、また大変光栄であることを、まず最初に申し上げますなければなりません。いずれ近く機会を得まして、アメリカの商船事情についての私たちが中断されました話をまた取り上げることができますように望みます。そのときもまた、きょうのように愉快なやりかたで中断されることを望みます」

「今のところは、この甥で私には十分ですな」と、伯父は笑いながらいった。「ご親切に心からお礼申し上げたいと思います。どうかご機嫌よう。それに、まったくありえないことではありませんが、私たちは」——ここで彼はカルルを心から抱きしめた——「つぎのヨーロッパ旅行のときには、おそらくかなり長いあいだ、あなたとごいっしょになれるでしょう」

「そうなったら、どんなに心からうれしく思うことでしょう」と、船長はいった。二人の紳士はたがいに握手し、カルルはまだ黙ったまま、ちよつと船長に手をさし出しただけだった。というのは、船長はもう十五人ぐらいの水夫たちにかかりきりになっているのだっ

た。彼らはシューバルの指揮下にいくらか当惑はしていたが、音高く部屋に入ってきたのだ。水夫は上院議員にお先に失礼しますと、彼とカルルとのために人ごみを押しわけた。二人はお辞儀する水夫たちのあいだを通つてたやすく出ていくことができた。とにかく善良なこの連中はシューバルと火夫との争いを冗談で、その滑稽さが船長の前でもやまないのだ、と考えているらしかった。カルルは彼らのあいだに料理場の女の子のリーネをみとめたが、この女はカルルに向つて陽気にまばたきの合図をしてよこしながら、水夫が投げ捨てたエプロンを身体に巻きつけていた。それは彼女のものだったのだ。

その水夫につづいて二人は事務室を出て、小さな通路へ曲つていった。その通路をいくと、一、二歩で小さなドアの前に出た。そこから短い階段が彼らのために用意されたボートへ通じていた。案内役の水夫はたちまちひと跳びでボートのなかへ飛び下りたが、ボートのなかの水夫たちは立ち上がつて、敬礼した。上院議員がカルルに、用心して降りるようにといまいめると、カルルはいちばん上の階段の上ではげしく泣き出した。上院議員は右手をカルルの顎の下にあて、左手でしつかと自分の身体に押しつけて、彼の身体をなでた。こうして二人はゆっくり一段一段と降りていき、しつかと抱き合ったままボートに入った。上院議員はカルルのために自分の真向いにいい席を探し出した。上院議員の合図で

水夫たちは本船からボートを突き離し、すぐ力いっぱい漕ぎ始めた。船から一、二メートル離れるやいなや、カルルは自分たちが今、会計課の窓が向いている側にいることに気づいた。三つの窓はどれもシューバルの証人たちに占められており、彼らはひどく親しげに挨拶し、合図していた。伯父さえも答礼した。一人の水夫は、規則正しい漕ぐ手を休めないままで投げキスを送るといふ芸当をやつて見せた。ほんとうに、火夫なんかもういなかのようだった。カルルは、伯父の膝に自分の膝をほとんどつけんばかりにして、伯父の眼のうちをじつとながめた。この人がいつかあの火夫のかわりになることができるだろうか、という疑いが彼の心に起つた。伯父のほうもカルルの視線を避けて、彼らのボートをゆさぶっている波のほうに視線を投げていた。



# 青空文庫情報

底本：「世界文学大系58 カフカ」筑摩書房

1960（昭和35）年4月10日発行

入力：kompass

校正：青空文庫

2010年11月28日作成

2011年1月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 火夫

## DER HEIZER

2020年 7月18日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

著者 フランツ・カフカ Franz Kafka

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>